

説教者としてのわたしの歩み

井田 泉

1. 御言葉への渇きから

わたしは牧師になるつもりはなかった。なるべきでない、ならない、と繰り返していた。信仰が行き詰まって破滅するとき、もし自分が牧師なら人を巻き添えにしてしまうだろう。恐ろしいと思った。

わたしの学生時代は学園闘争と教会革新運動の嵐の吹き荒れた時代だった。ある年の夏、日本聖公会学生キリスト教運動（SCM）の「スタディ・カンファレンス」というのが野尻湖畔で開かれた。講師のT氏は「今どき、イエスの復活を本気で信じている者など一人もいない」と言い放った。ショックだった。

それ以来、「復活」が分からないことが悩みの中心となった。礼拝には毎週出席し、サーバー（侍者＝聖餐式で司祭を助ける役）をしていたが、礼拝の最初から最後まで「後から人間が勝手に作ったものではないか。神は存在しないのではないか」という疑問に苦しんだ。

所属教会の牧師の説教はわたしの疑問と悩みに答えてくれなかった。いろんな神学者の言説が登場し、雑誌の社会評論が取り上げられたが、わたしの中には叫びがあった。「そのようなことを聞きたいのではない！ 神が生きておられるなら、生きた福音の響きがあるはずではないか！」

友人の教会の交わりに加えていただいて、かろうじて渇きを癒していた。

大学（大阪外国語大学朝鮮語学科）を卒業する少し前、通学の電車の中でルカ 24 章の「エマオ途上」の物語を読んでいた。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたのではないか」のところで、心の中に暖かいものが燃えた。それが何日経っても消えなかつ

た。そうして、復活のイエスがずっと、悩むわたしと共に歩いて下さったことを知った。悩みであった「復活」が、生きる喜び、また命となった。

その後、同志社の大学院（歴史神学専攻）で学ぼうと、そんなはずはなかったのに聖職志願を出し、東京の聖公会神学院に入学した。

在学中、ひどい状態になり、容易に回復しなかった。あれほど心を喜びで満たした復活のイエスのリアリティも感じられなくなった。神をふたたび見失った。恐ろしい不安がしばしば襲って来た。何とか救われたいと思って、祈祷書の末尾に収められている詩編（当時は文語）を一挙に数十編、声を出して読んだ。聖書と水筒だけ持って山に登り、神を呼んだこともあった。

ボンヘッファーの『誘惑』を読んだ。自分の魂の苦しみを知ってくれる人がここにいる。ありがたかった。

「イエスもまた誘惑においてご自分の力をすべて奪われ、神と人間とから見捨てられてただひとりにされ、サタンが強奪を不安の中で忍ばなければならず、彼はまったくの暗黒の中につき落とされる。彼には、彼を固くとらえ、彼にかわって戦い、勝利するところの助け・守り・支える神の言葉以外に何も残っていない」。

「彼にかわって戦い、勝利するところの助け・守り・支える神の言葉」。聖書を探求するほかないと思った。たとえ自分がそれを感じられなくても、マリアが「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」と歌うのをどうして「うそだ」と決めつける権利がわたしにあらうか。マリアをそのように歌わずにはおらせなかったもの。それを確かめたいと思った。自分の中の信仰ではなく（そのようなものは「ある」とは言えなかった）、自分の外にある「証言」が重要だ。全聖書の、そして教会の歴史のあらゆる信仰の人々の「証言」を聴き、それを確認しつくすまでは死ぬ

わけにはいかないと思った。

神学院の 2 年目。関田寛雄先生の説教学を受講した。自分の求めているものに出会った気がした。最初の講義で先生が「福音の言葉が生きて働かなければ、リタジーも sacrament も意味と力を失ってしまう」（不正確な記憶だが）と言われた言葉は忘れられない。

2. 説教者にして説教の教師

信仰の問題が解決しないままに神学院を卒業し、京都の下鴨基督教会に派遣された。ひと月、いや数日を過ごす信仰もなかった。かつてイスラエルの民が荒野を旅したとき、朝ごとにその日のマナを受けたという。わたしもその日一日を生きて働くための御言葉と信仰を願い求めて、一日一日を生き延びた。バルトの「信仰は——朝ごとに新しく！——ひとつの歴史である」（『福音主義神学入門』）という言葉が励ましであった。

雑用に追われ、説教の準備をする時間がなかった。土曜日の夜になると決まって不機嫌になり、家族に迷惑をかけた。

一所懸命準備しても「先生、今日の説教はおもしろなかった」と言われることもあった。後から思い当たることがあった。それは、この言葉だけでは不十分と感じて、他の聖書の言葉をやたらと補強するように付け足した時だった。中心にしようとする言葉をもっと深く聴く必要があるのだ。いくら熱心に語ってもどこか空虚な気がすることもある。それはたいいてい、語る自分がその言葉を自分のために味わっていない時である。

司祭となって自分で聖餐式を司式するようになったとき、毎回感動を味わった。しかし月日が過ぎ、疲れがたまってくると、毎回先発完投を要求されるピッチャーのようで、「牧師とは毎週説教すべく呪われた存在だ」などと思ったりした。

5 年間下鴨で勤めた後、立教大学キリスト教学科の助手になった。助手の 3 年目、関

田先生の後を任されて聖公会神学院の説教学を担当することになった。神学院の専任教員として過ごした 15 年を含め、計 16 年間説教学を担当したことになる。

わたし自身は志願の時から御言葉の務めを聖職の働きの中心と考えていた。神学院を卒業する前に渡された概評には「聖書への関心に比して教会論や聖餐論への関心が薄い」と書かれ、それで何が悪い、と居直っていた。しかしこんなわたしは日本聖公会には珍しい存在であったようだ。

聖書をろくに読まずに神学校に入ってくる者が少なくない。説教の重要性を強調すると、「説教は主要な務めとは思っていなかった」と言う学生がいる。なんと正直な、と思いつつため息が出る。1970 年の改革まで聖公会神学院には独立した「説教学」の科目はなく、「礼拝学」に含まれていたという。

聖公会は言わばローマ・カトリックとプロテスタントの中間にある教会である。宗教改革は行ったが、カトリックの伝統の多くを残した。両者の長所を生かすことができれば素晴らしいと思うのだが、実際には伝統的な儀式（主として聖餐式）に寄りかかって、御言葉と毎週新しく出会う努力を怠ってきたのではないか。

自分の使命は日本聖公会の説教者を育成することにあると信じて努力した。聖書の釈義、黙想、会衆、今の時代また自分自身との関係など、説教の課題は多い。技術的なことも実は本質に関わることである。しかし説教の成否は、最終的にはわたしをとおして神ご自身が語ってくださるかどうにかかっている。「心に汗をかき、原稿を書き、そして最後は恥をかこう（失敗を恐れずメンツにこだわらず勇気をもって語ろう）」。そう言って学生を励ました。

1980 年代の特に後半から切実に思っていた課題がある。日本聖公会の戦争責任の問題である。『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』（富

坂キリスト教センター編・新教出版社)の編集に携わったこともあり、日本によって神社参拝を強制された朝鮮のキリスト者の叫びが自分の魂に突き刺さっていた。当時の日本聖公会の礼拝を調べてみると、侵略戦争と植民地支配を支持・協力し、天皇制国家の繁栄を願うものばかりである。

たとえば教務院(現在の管区事務所=日本聖公会の執行機関)の名で作成・配布された「支那事変特別祈願式」という礼拝式文(1937年)の中には『国民精神総動員』ノ趣旨併せて非常時信徒ノ本分ニツキ説教ヲナス」とある。神の意志を伝えるべき説教が、国家の意志を代弁するものになってしまっている。説教者としてこれだけは許すことはできない、神への背信行為だと思った。聖書、ことにエゼキエル書は、日本聖公会の戦争責任を負うようにわたしを強制した。

説教や講演でこうしたことに触れるのは辛かった。あるときの講演に対する聴衆の最初の反応は「今日の話は何の意味もない」というものであった。「過激で偏った教師たち」に支配(?)された神学校に学生を送るわけにはいかないという声が聞こえてきた。

3. ふたたび牧師として

長い間のストレスのせい、うつ病になり、精神科にかかった。本を読んでも意味が取れない。物を考えること、判断することができず、会合でも全く発言することができなくなってしまった。目の前にいる人と話すにも声が出にくく、ひどく疲れた。「礼拝のときに声が出ますように」と祈った。気力と意欲を失い、好きな音楽も聞く気がせず、書店に入ると吐き気がした。感情が(不安と悲しみと「死んだらどんなに楽だろう」という思いのほかは)動かなくなった。頭が「透明の箱」の中に入っているようで、人とのコミュニケーションが困難だった。

2000年春、聖公会神学院を退職、母教会

で1年間静養の時を過ごした。アパートに住み、日曜ごとに教会に通って聖餐式を司式し、月2回説教した。時間はあったので原稿は早めにできたが、原稿に書いてあることしか話せなかった。毎日夕方散歩に出かけ、公園のベンチに腰掛けて祈った。神はわたしを使い尽されて、この世にはもはや自分のなすべきことは何も残っていないのではないか、という気がした。

2001年春、京都復活教会牧師に任命された。不安を抱えての赴任だった。相変わらず頭に「透明の箱」を被っていた。毎朝、人と会う前に必ず礼拝堂で時を過ごし、その日の聖書の一節を心に刻むようにした。

2年と数ヵ月を経た今、猛烈に仕事をしている。ここまで回復したのは多くの方々の祈りがあったからだと思う。復活幼稚園の子どもたちの歌声は天使の歌声のようにわたしを慰める。今では、神が強制的にわたしを休ませ、長い時間をかけて癒してくださったのだと思えるようになってきた。しかし元気になった分、いろんな課題に気づくようになり、やりたいこと、やらなければならないことが急増した。

今年になってからの7ヵ月の間に原稿を用意した説教は85回(幼稚園も含む)。原稿なしの説教やいろんな集まりでの話まで含めると200回以上になるだろうか。不思議に語るべき言葉が与えられる。これはとても自分の力ではない。ためらいながら言うのだが、聖霊の働きを感じている。しかし祈りの時をしっかりと持たないと危ないと思う。

神学生るとき読んだボンヘッファーの『説教と牧会』には「1回の説教の準備は12時間を目安とせよ」とあった。とても無理だと思った。一つの説教を作るのに30時間もかかったのだから。卒業後10年くらいして、12時間は妥当な線だと思えるようになった。けれども今、とてもその時間はかけられない。

言い訳になるが、牧師と園長と、それに教

会が持っているキャンプ場の事務もある。説教テキストの黙想は早くに始めるが、積義的な作業が全くできないこともある。土曜の夜、床に就くのは平均午前3時である。

今の願いは教会全体を「宣教的にする」ことである。礼拝を「神と人の出会う場」としたい。神の国（愛と正義と平和）の実現に参加する教会でありたい。各個人と色々な会や奉仕のグループが信仰的に自立していくようにしたい。それぞれの働きを責任的に引き受けるリーダーを育てたい。「牧師がいなくてもしっかり歩んでいける教会に」などと言うのは乱暴すぎるだろうか。

牧師は多様で複雑な求めに応えることを迫られる。考えの違う人やグループの間に立って調整役を務める必要もある。困難を抱えた人を前にして、何の力にもなれないと感ずることがある。「聞くだけでよい。一緒に悲しみを共にすることが大切で、言葉は必要でない」とも言われる。ほんとうにそうだ。しかしあえて問いたい。いつもほんとうにそれだけでよいのか。その人の苦しみを受けとめ、それを神の前に携えていくのが牧師の仕事ではないのか。聖書を開き、その人と共に聖書の言葉を聞く。救いの約束にすがって祈る。そして祈った以上は、神がその人の困難と一緒に負ってくださったと、そこまで伝えるのが牧師の働きではないか。具体的状況と聖書の言葉を仲介する役目が牧師にはある、ということだ。

説教がどうしてもできないときのわたしの方法を要約する。①可能な努力をする。しかし自分に無理強いをしない。②原稿を思い切って短くし、聖書テキストの大事にしたいところ一箇所をじっくり心に暖める。5分の説教でもいいではないか。③説教の務めを全うできるように、貧しい言葉を通して聖霊が語ってくださるよう、はっきりと具体的に祈る。本番においては神が働き用いてくださることを信じて誠実に語り、自分で力んだり気

後れしたりしないようにする。主体的に働かれるのは聖霊なのだ。

牧師自身が御言葉を必要としている。すでに救われてしまった者として、所有しているものを会衆に与えるのではない。自分が必要としている御言葉を、会衆と共に聴くのだ。そうして、説教しなければ与えられなかった命の言葉に出会う。

今年の聖霊降臨日に一つのことに気がついた。それは、神の霊は神の国（愛と正義と平和）の実現に向かって歩むように私たちに情熱を注ぐ、ということである。戦争に向かって雪崩を打って走るこの国の中で、平和への神の情熱を聖書からくみ取りたい。神が人の目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる日を待ち望みつつ、御言葉と聖餐の奉仕に立ち続けたい。

（いだ いずみ 日本聖公会京都復活教会牧師）
『福音と世界』2003年9月号